

日時：令和3年2月1日（月）15：00～17：00

場所：オンライン

※傍聴場所：大阪府立江之子島文化芸術創造センター2階 多目的ルーム10

出席者：服部委員長、佐藤委員、坪池委員、藤田委員、米山委員、指定管理者、事務局

【議事概要】

1 開会

2 議題

(1) 江之子島文化芸術創造センター指定管理者の評価について

(2) その他

3 閉会

◎主な意見等（意見交換）

服部委員長

enoco は、クリエイティブな施設であり、コロナ禍の逆境だからこそその試行や実験ができたこと館長もおっしゃっていたが、創造的な発信をしていく場所。だからこそ、逆境でのトライアルアンドエラー、アフターコロナにむけたアイデアをどれだけ貯めておけるか。それこそ、この施設やクリエイターたちが行っていかないといけないこと。

また、美術作品の利活用に関し、教育プログラムとして展開されてきたことについては、昨年からもやってこられたことではないかと思うのですが、コロナという状況のなかで本当に必要な役割を担ってこられてたんじゃないかと思う。

坪池委員

： 緊急事態宣言が解除されて以降、全国のホール等に取材をしている中で、一番つらいのは、今はみんなどうとでもがんばれるが、先が見えないので対処のしようがない、とのこと。先が見えないこの状況が一番厳しいという声が多かった。今後、活動を継続していく上で、指定管理者に資金の欠損が発生してきたとき、どういったふうに考えていくのか整理をつけておかないと一時的な状態は凌げても、継続的にはなかなか難しい、ということを実は心配している。そんな中、事業をしている多くの館で、指定管理者の欠損を補填している自治体が思ったより多くて心強かった。

また、「地域創造」でコロナ特集をした際、マネージメントの方々の座談会で出た意見として、文化施設及び社会教育施設として有料で事業を行うということは、果たしてどういうことなのか。ということを変えて突き付けられたと仰っていた。社会の中で文化芸術なり、文化教育、文化福祉といったことを位置付けていくのに、有料で提供すべきなのか、そのところをもう一度文化施設の方々と共有して議論していきたい。本来、文化施設を社会の中でどう位置付けるのか、ということ掘り下げて考える必要があるのではないか。

また、enoco では、大阪国際がんセンターへの貸出事業もやっているが、美術館で入場料金を払って作品を観るのと、病院に行って作品を観るのとは、ある意味、アクセシビリティでいうと差がない。せつかくある財産・資産をより広い方々に入口をもっと開放して、享受していただくという方が大切なのではないか。そのところがないから、人類の共通資産である美術品だとか博物館の収蔵品に対する理解が進まない。

enoco からの報告にあった、アーティストのポートフォリオとか確定申告の講座の話だが、こういう社会のベースのところをアーティストが学ぶ機会というのが、すごく少なく、この状況で問題として露呈した。社会人としての学びをきちんと提供していくということが中間支援団体として大変重要である。その学びの場をオンラインで提供したということに、enoco の重要な役割があるのではないかと思った。

それから、オンライン会議等が普及しているのだからenoco マークの壁紙、コロナ対策の一環としてデザイン性の高い、また多言語でのマークなどを作成し、無料でダウンロードできるように提供する等そういう発想をもっとすべきだったのではないか。つまり enoco がいろいろな創造力の発路となって、それを所有するネットワークで提供し、みんながそれをダウンロードできればよかったのではないかということ。そこにちょっと enoco のマークが入っていれば、それだけでだいぶ気分が違うのではないか。その他、例えば、ある美術館では動物マスクを作っていて、お面のようにして身に着けて、美術館の中を散策することで子ども達のライフワークを守る取組みをしたり、他には、密なワークショップができないので、予め子どもたちが作った作品を巨大な木にアーティストがインスタレーション(※)することで表現を一段階面白く、子ども達はアーティストの力を実感するという取組みなど。

真面目で、「遊び方」の下手さが見えている。もう少しフライング的に遊ぶことで、この状態が数年続いても力強く生きていけると思う。

(※インスタレーション: 展示空間の壁や床に、空間と有機的な関係を持つよう立体作品を設置する方法、ないしはその作品)

服部委員長 : 前に前に出て行く姿がやっぱり、見ている側にとってはすごく勇気づけられるというか、つまらないアイデアであっても打ち出すことが大事だと思う。

プラットフォーム形成支援事業に関しては、今年度はNPOを設立し、自立化していく手前の段階でこれから伸びるぞというタイミング。ただ、もしかすると自立後も、プラットフォーム形成支援事業として地域に貢献していく何か、enoco の事業自体に残っていてもいいのではないかなというふうに思っている。最近では、割とソーシャルデザインという言葉を使わなくても、誰もがそれをベースとして考えながら物事を進めていくというふうになっているので、敢えて出て行く必要はなく、むしろ素材として遠隔にいる人達にアドバイスをし、当人たちがそれをもとに実施していくような姿が今後の enoco の姿ではないかというふうに思った。教育プログラムでもこれだけスマートに遠隔・少人数で実施できているので、地域のみならず遠くの人との相談にも対応できるはず。

藤田委員 : おおよその評価に違和感はなく、本当に色々な取組みをこのコロナ禍の中であって、工夫をしながら、取り組んでいる。また、制約の中で、これまでの取組みをしっかりと取りまとめるなど今だからできることにもしっかりと取り組まれている。今は、ジャンプする前に身をかがめているような状況で、動き出せるようになったら、そういった整理したものを使ってまた次のステップにいけるのではないか。

経済界においても、先が見えないというのが一番しんどいという中で、唯一、大阪関西万博が、70年万博の再来というイメージで、万博があるから先を見て頑張れるというような声もある。文化芸術の分野でも、万博に向けて何かみんなと一緒にできる、産み出していけるような明るい未来をみんなで探りながら作り上げていくことができたと思う。

服部委員長 : enoco のポッセも万博のボランティアスタッフにふさわしい。SDGs含め、文化リテラ

シーが高い人材を育成し、ともに万博を目指すというのもありじゃないかと思う。

佐藤委員 : enoco の事業は恐らくコロナの影響が直撃すると思われるが、ただ単なるオンラインへの切り替えではない取組みができてきているように思った。教育事業やコレクションキャラバンは、コロナ後に向けた種蒔きというより、将来、普段通りの日常が戻ってきた場合でも、これがすごく立派な武器になっていくんじゃないかと感じている。アーティストへの支援も非常に素晴らしいし、貸館事業も固定の利用客が付き始めているのではないかと感じた。どちらも運営の収入というのでは、大きな柱になっていくのでは思う。

服部委員長 : 教育というのは、「教える」「教わる」「育つ」「育てる」「育てられる」と意味するものも様々で、言葉の持つエネルギーがコロナ禍で色々言われてきたのではないかと感じている。今年度は、きっと誰もが種蒔きの時期だったと思うんですけど、今後はそれを育てるというフェーズに入っていくんだなと感じている。

米山委員 : 今回の評価は、コロナの影響を鑑み、数値目標に捉われずに行うということですが、今後、なし崩し的にならないように、なんらかの基準のようなものを整理していかないといけないのかなと思う。コロナの影響はしばらく続くと思うので、今後、コロナが言い訳になってしまっても、少し困ると感じている。

また、数値に捉われず評価となっている割に、「利用者満足度調査(アンケート調査)」については、アンケート調査の結果でプラス評価が「98%」と非常に高い満足度になっているのにも関わらず、「B」評価であると「数があればいいのか」というふうにも捉えられかねない。今回は、指定管理者、施設所管課それぞれの説明で評価自体はそのまま構わないが。

関西エアリアルの試行については、実験ということだが、今後も新しいことをやって情報発信していけばよいと思う。

なお、提出された財務諸表からは運営上問題があるということは発見できなかった。

服部委員長 : アンケートの回収総数的には、来場者数が減少中ということもあり数は少ないものの、今年度 enoco にアクセスして下さった人とは、リテラシーがとても高い人達だと思う。こういう人達と息長く付き合っていくにはどうすればいいのかということの方が、実は重要。

また、オンラインで繋がるのが主流になる中、アジアの各地域の文化施設との交流を今後やっていけるのか。アイデアをシェアする相手としてアジア圏の文化施設との交流というのが考えられ、ネットワークを広げていくことが次の一番の課題になっていくと思っている。20世紀はヨーロッパのモダニズムに追いつこうとしていたが、コロナで全世界的に同じ状況で改めてスタートラインに立った時に、アジアの価値というのを改めて発信していく良いタイミングなのではないかと感じている。アジア圏は時差がないというのが実は大きな価値であり、オンラインという、距離を飛び越えられるツールを手に入れているので、それを使って今後交流をしていくことを目指してほしい。

enoco の収蔵作品も同様で、11月に実施された「岩宮武二展」に展示された写真に描かれている昭和の暮らしの風景というのも、すごくヒントがある。戦後の暮らし・生活を改めてアーカイブしていくこともすごく重要で、それを受止めて、どう自分たちのアイデアとしていけるかということも大切。enoco は、収蔵作品も施設も人材もすごく価値があると思うので、今後は大きく広く根を張って進んでいける施設になることを願っている。

坪池委員 : Webやオンラインでの展開というと、違うスキルを持った人が必要。アーティストだからといってITのスキルに長けている訳ではなく、全然違うスキルを持った人が求められてい

て、それはアーティストも学ぶべきだし、そういう新しいスキルは役所の中にも必要。また、コミュニケーションのあり方も、もっと柔軟に考えないといけない。年齢も立場も居住地も全く違う人達がオンラインで会って、同じものをみて同時に表現を行うなど。当事者間の距離感やその場の在り方、そういったコミュニケーションのあり方、言語化する部分はまだ難しいところはあるけれどデジタルとオフラインがクロスしていくことに可能性があると思っている。enoco のような人材豊富な施設が是非トライしてほしい。

服部委員長 : デジタルとアナログを上手く使いこなしていく。これまでのカテゴリーをむしろ超えて、新しいジャンルを生み出すということに、どう取り組めるかということが次なるミッションだと思う。20 世紀というカテゴリーの中で歩み続けていってだけでよいのか。今後、我々が歩むべき道・新しいカテゴリーを生み出していくことがこれからの課題だと思う。

以上、委員の皆さまからいただいた指摘・提言については、事務局で整理を行い、公表する。